

【佳作】

寒くなつたら

熊谷佳代・奈良県

寒がりの母だと思っていた。

オフホワイトの綿糸で編まれた薄い長袖のカーディガン。胸には、トリコロールカラーの刺繡糸で花の装飾が施してあつた。

夏用のそのカーディガンは、小学一年生の時に母が買つてくれたものだ。手編みでもなく、決して上等な物でもなかつたけれど、その色形とやわらかな感触は今でもよく覚えている。

カーディガンが小さくなると、今度はピンク色のカーディガンを買つてくれた。そして、そのピンク色のカーディガンが小さくなると、母は、また別のカーディガンを買つて来了。

「寒くなつたら、着いや」

友達と出かける時、家族と出かける時、母はいつもカーディガンを手渡してくれた。私は、寒がりの母が、私の身体の事も気遣つてくれているのだろうと思っていた。

しかし、である。大人になり、エアコンの効き過ぎによる手足の冷えを「辛い」と感じる年齢になつた今でこそ、夏場のカーディガンの有難さが分かるようになつたが、小学生の頃の私が末端冷え性を気にするわけもなく、母が手渡してくれたカーディガンは、たいていカバンの中に押し込まれ、クチャクチャになつていた。

気づいたのは、数年前の事である。当時小学生だった息子が罹患し、大きな手術を受けたのだ。幸い手術は無事に終わり、経過も良好だが、首筋には痛々しい傷跡が残つた。女の子なら髪の毛で隠す事もできるが、小学生の男の子がロン毛というわけにもいかないだろう。

手術を受けたのが秋の終わりだったので、私は、息子にマフラーを買つてやる事にした。春になる頃には、傷跡も目立たなくなつているだろう。

さつそく、近所のスーパーの衣料品売り場へ行き、どんなマフラーがいいかとあれこれ選んでいる時に、ふと、あの頃の母の言葉がよみがえつた。

「寒くなつたら、着いや」

（寒くなつたら……）

「あつ！」

思いつきに、私は思わず声を出していた。もしかしたら、母は、本当は別の言葉を掛けたかったんじゃないだろうか。

私の左腕には、赤い痣がある。単純性血管腫という名前のついた消えない痣だ。赤ちゃんの時からあるので、私にとつては、もう自分の一部のような痣である。

母は、痣のある私にも、皆と同じように半袖の服を買つてくれた。制服も半袖、Tシャツも半袖、夏だから当たり前。子供の頃からそんなふうだつたから、私自身、痣へのコン

プレッカスはほんとない。思春期もさほど傷つかずに過ごし、恋もした。初対面の人からは驚かれるので、せいぜい説明するのが面倒だな、と思う程度だ。

けれど。母にとつては違つたのかもしれない。大事な大事な娘の腕にできた痣。人目に触れる場所にできた、赤い痣。

「痣を隠したくなつたら、着いや」

母は、本当はそう言いたかったのかもしれない。痣が気にならない時は、半袖の服を着ていればいい。けれど、もしも痣を隠したいと思う時があれば、カーディガンを着ればいい。強がる必要はないんだよ。そう言いたかったんだ。

私はカバンから携帯電話を取り出した。離れて住む母に、想いを確かめたくなつたのだ。登録してある番号を押そうとして……やめた。

（「おんなじ母」だからね。）

カバンの中でクチャクチャになつたカーディガン。やわらかくて温かいそのカーディガンを、今、取り出してきちんと畳もう。そしてまた、そつとしまつておくのだ。寒くなつたら、いつでも着られるように。

「寒くなつたら、巻きや」

朝、登校する息子に、マフラーを手渡しながら声を掛けた。紺色の子供用マフラー、傷跡に当たつてもチクチクしないようにとやわらかい素材を選んだ。息子は、「うん」と言いながらマフラーをランドセルに詰め込んでいる。

（きっと、大丈夫だ）

寒がりの母は、思う。